

遠く古の時代より受継がれてきた若美町の「ナマハゲ」。時代の変遷に伴う生活習慣や住民意識の変化、若者の減少は、ナマハゲ行事の衰退を生む。その存続の危機に地域住民が立ち上がり、世代を超えた協力のもと後世に伝えていく取組みがなされています。

## 地域住民が支える重要無形民俗文化財「ナマハゲ」（若美町）



「なく子はいねえがー」  
若美の新年連ぶナマハゲ

大晦日、シンシンと降りしきる雪。正月の仕度を終え、家族みんなで早めの年とりの「馳走をいただく。子どもたちは唇間からなにやら落ち着かず、しきりに外の様子を気にしている。犬の遠吠えなのか、うねるような響きが、ずーっと向こうから近づく気配は気のせいだろうか。じつちやと父さんは囲炉裏を囲んでなにやら話している。ばつちやと母さんは台所でまたお膳の用意をしているようだ。小声で話し通り過ぎる数人の男たち。ワサワサ、カサカサと「ワラ」の擦れるような音。  
玄関の引き戸がかすかな音をたてる。次の瞬間、家中が揺さぶられるような叫び声とともに荒々しく一匹の「ナマハゲ」がやって来た。  
『ウォー、いだが「ワラワラ」』

『ウォー、なく子はいねえがー』

若美町の新年はナマハゲが運んできます。荒々しい叫び声と立居振舞で、子どもたちへの戒めと家人への約束を残し、過ぎゆく年の災いを払い、新年の息災を全身から発散させ「来年もまだ来ると」などと言いつれし立ち去ります。

菅江真澄の見聞記にも登場する若美のナマハゲ

ナマハゲ行事は、男鹿半島全域から若美町全町に及ぶ広い範囲で、しかも古来の形式がそのまま残っている例は全国的にも珍しく、まさしく奇習であり、昭和53年には国の「重要無形民俗文化財」に指定されております。

全国によく知られているナマハゲは主に男鹿市のもので、若美のものはその一部であると思われていますが、むしろ江戸時代後期から昭和の前半



にいたる期間に盛んに行われていたのは若美町や八郎湖岸の村々であったようです。

その裏付けにナマハゲの風俗の記録として最も古いものは、今より190有余年遡ること文化8年(西暦1811年)当時の紀行家菅江真澄の見聞記『男鹿のさぶ風』に、真澄が同町宮沢地区の農家に寄宿してこの風習を見た貴重な記録が残されています。

ナマハゲの由来や在所については様々な説がありますが若美町では一般的に、男鹿の真山から怠け者をこらしめるためにやってくる。湯向かいの森山や太平洋からも八郎湖のシガ(氷)を渡ってやってくる。そしてナマハゲは年中お山で怠け者の行状を見ている。などと言われています。

### 青年会組織の弱体化が

### ナマハゲの衰退の一因

若美のナマハゲは通常夫婦連れで、青と赤の鬼の面をつけ、わらで編んだ『ケラ』という衰状のものを身にまとい、素足にわら靴(現在はほとんど履かない)、手には桶、トゲのはえたタラの木、銀紙を貼って模した出刃包丁などを持ち、新参の若者(現在は主に中・高生)が餅やご祝儀を入れる袋を担ぎ、三人一組となつて数組に分かれ、それを町内毎に家々を回ります。

かつては各町内の青年会会員が自らの手で行事の一切を取り仕切り、行っていました。大晦日のこの日だけはナマハゲを演ずる若者の特権として無礼講が許され、縦横無尽に暴れまわり家々を回って歩いたといえます。そして若者から若者へとナマハゲは受継がれて来たのです。

しかしながら、同町もまた農村地域として例外ではなく深刻な過疎化を背景に少子高齢化が進行、若者の減少とともに青年会組織が弱体化し、かつての、若者が地域づくりを積極的に行っていこうとする気運も衰退していきました。



昔とつた杵柄で若い衆にケラ編みを指導するかつての若い衆

そして多くの青年会が姿を消し、22の町内会のうちナマハゲ行事を休止する町内が相次ぎました。

### 暴れられないナマハゲ 受け入れ側の意識も要因

ナマハゲ行事の衰退したのは何も青年会だけのせいではありません。暴れまわるナマハゲが少々元気を無くしたのは最近のことで、家々の改築により外から一気に駆け上がつてきたナマハゲも土足ではとても入れなくなつたり、以前はガラス戸が一枚や二枚割れても神様のしたことで許されていたのが、大きなサッシ戸となると無礼講では済まなくなつたりしました。また、「子どもが怖がりすぎるのでうちには入らないでくれ」という声まで聞こえます。さらには、受け入れる家々

が「回ってくる時間が遅い」と言つてみたり、「お客がいるのでうちを先にして」などと自分の都合だけでわがままな注文をするようになったりと、少数精鋭でやつとこさ頑張っている青年会のモティベーションを削いだことも衰退の一因となっています。

### ナマハゲの元気は地域の 元気、ふるさと若美の誇り

「このままでは、先人達によつて受継がれてきた若美のナマハゲが途絶えてしまう。」という危機感から行事を繋げてくれたのは、ナマハゲ行事の伝統を次代に渡したばかりの青年会OBたちが多くいる各町内の親の会でした。

小さい頃、怖いナマハゲをなだめ、守つてくれた親父は、とても頼もしく大きく見えたという記憶が、「自分の子どもにも自分が経験したナマハゲを見せてあげたい。」という思いが存続の危機を救つたのでした。

その後、各町内ではナマハゲが衰退した前記の要因などについて世代を超えた話し合いを重ねるなどして、ナマハゲ行事は地域全体で盛り上

げていかなければならないという気運を高めていきました。40、50代の町内会有志が集まつて、休止状態の青年会を掘り起こし、往時の若い世代によるナマハゲを復活させたり、しばらく取り止めていたナマハゲを地域住民の力で復活させたりする町内も出てくるよつになりました。

また、この行事の準備で最も手間のかかつていた「けら」編みを、地域のお年寄りから指導を受けたり、製作自体をお願いするなどして、現在町内会・親の会・婦人会組織・老人クラブなど地域ぐるみで世代を超えた協力のもと、若美のナマハゲを後世に伝えていく取組みが行われています。ナマハゲの元気は、地域の元気に繋がり、ふるさと若美の誇りとなっています。

平成16年12月31日、今年もまた暴れまわる元気な若美のナマハゲがやってきます。



お父さんの力を借りて怖いナマハゲにお酌をする



いざ出陣の前に神社でお祓いをするナマハゲたち